

幼稚園でしてゐるこご (四)

—おはなし—

倉橋 惣三

「先生は、おはなしがお上手だつて、子どもが、いつも喜んで居ります」

「あら、お聡しい。お上手なんて……」

「子どもが始終歸つてから、おはなしをして聞かせます」

「よく覚えてゐらつしやいますのね」

「折角していただくのでございますも」

「お宅のお子さんは特別おはなしがお好きで」

「覚えるのがよろしいのでございませう」

「是非覚えていたゞかなければいけないといふ譯ではありませんか」

「さようなんでございませうか」

「學科といふ譯でもありませんし」

「では……」

「話の中のことを感じていたゞきたいのです」

「よく理解して」

「それは、ながくむづかしいでせうし、理解よりも、もつと感じて」

「幼稚園のおはなしは教訓が多いのでございませうね」

「さうでもありませんまい。修身の時間やありませんしね。教訓も含まれてゐるに相違ありませんが、それよりも」

「それよりも……」

「そうね、なんと申ませうか、まあ言つて見れば味でせうか……」

季節の御馳走

榮養研究所 佐々木理喜子

國策に副つて代用食や混食を召上る時の御參考に今月の獻立を作りました。第一のは米の量を13位減少して馬鈴薯を混ぜ、第二は米食をやめてメリケン粉だけにしました。取合せる材料に注意して榮養價の充分ある様に、不足勝なビタミンBは大豆や其の他の豆で補ひませう。一と二は主副合計の榮養量で標準量は、蛋白質一三・八瓦、溫量三六六カロリーです。

(一)まぜ飯(馬鈴薯入り)

材料 米五〇瓦、馬鈴薯四〇瓦、秋刀魚二〇瓦、人參二〇瓦、牛蒡四〇瓦、大豆五瓦、以上で蛋白質一三瓦、溫量三七〇カロリー

作り方 大豆は前日から水に浸し軟けて釜に浸汁ごと入れて一度煮立て、次に米と、皮を剥りて賽目に切つた馬鈴薯を入れ水加減をして御飯を炊きます。人參は織切り、牛蒡は小さく笹缺き軟く煮て、

「へえ」

「おはなしはお子さんには、たべもの、やうなものですからね。それもお菓子のやうな。榮養がほしいのは勿論ですが、よく味はふのでなければ……」

「甘いおはなし、からいおはなし」

「味といふと、そういふことになります。つまり、その中の教訓や知識だけでなく、それをそれとして、心の中に取り入れなくては……」

「呑み込みよく」

「呑み込んで仕舞つては、まる呑みになり、う呑みになりますかね」

「口の中で噛み又しやぶつて」

「まあ兎に角く、分るばかりでなく、味として心の中へ受取るのですね」

「幼稚園で、おはなしを何故あんなに大切なことになさるのですか」

「子どもが求めるからです。求めながら自分でも分らない心持ちを、おはなしで満足させてやるのです。教へるとかさえずとか、こつちで與へるといふよりも、子どもに心になつて心を充たしてやるの

です」

「もう少しよくおつしやつて下さい」

「たとへばです。力持ちの話をします。子どもが力持ちになりたがつてゐる心な、そうだが、そうなりたいたの。自分が、そうなつてゐるやうな氣がするよと、たらふく満足させるのです」

「子どもが、おはなしを大好きなのもそのためですのね」

「そうですよ」

「狐を求める子に狐の話、お猿を求める子にお猿の話……」

「狐を求めるなんてことありませんよ。狐なり猿なり、それは肝心なことぢやなくつて、そこに動くいろ／＼の心持を求めてゐるのです」

「なるほど」

「子どもは、いろ／＼の心持ちをもつてゐますが、實際の生活の中で體驗實感することほむづかしい。そこで、おはなしの中で、體驗してよろこぶのです。又その意味で、教育もされるのです」

「私も、うちでもそうしてやりたい

砂糖、鹽、醬油で薄味に煮ます。秋刀魚は兩身を下し小さく切つて此の中に入れて煮ます。御飯を移す時によく混ぜます。

(二)すいとん

材料 メリケン粉六〇瓦、南瓜五〇瓦、油揚八、豚肉二〇、青菜一〇、油四瓦、以上で蛋白質一四瓦、温量三四

四カロリー

作り方 煮出汁を作り、野菜を入れて軟くし、豚肉は後で加へます。メリケン粉は水でこねると硬くなりますので熱い湯を用ひます。又上新粉を少量混入しても軟くなります。黄粉がございましたら粉に少し混ぜて下さい。これはビタミンBと蛋白質を補ひます。

(三)うどんのトマトソース和へ

材料 うどんの玉四〇瓦、玉葱二〇瓦、人参一〇瓦、鯖四〇瓦、油少々、トマトソース二〇瓦、以上で蛋白質八

四瓦、温量一〇八カロリー

作り方 うどんは一寸位に短く切り油でざつと炒め鹽味にします。玉葱、人参は繊切りにし、鯖は賽目に切り、いづれも軟く煮てうどんの上のせ、トマトソースは砂糖、鹽で味を作り、其の上にか

けます。

のですが、下手で」

「下手とか、上手とか、そんなこといりませんよ。幼い子へのおはなしは、ごくらくくと、技巧なんか使はないのが却つてよろしいのですから」

「でも、幼稚園では皆を集めて、先生はお立ちになつて」

「いやですよ奥さん。そんな公會堂のおはなし大會のやうなこと」

「さうですか」

「藤棚の下でも、お庭の隅でも、二人でも三人でも。私達も椅子にらくに腰をかけて、お宅の椽側か、お居間の火鉢のそばかなんかのやうに」

「それで子どもは謹聴して」

「ハ、ハ、ハ。謹聴なんて。お説教ぢやありませんし。子どもらくらくいる／＼のことを申しますよ。なかには、途中から話をとつて仕舞ふこともある位で」

「そうすると、おはなしよりも話しあひですね」

「そうですね。その方が、ほんのお話ぢやありませんか」

「それでよろしいのでせうか」

「よろしいどころか、そうして、子どもと語る譯なんです」

「どこかで出てゐる童話の雑誌の名のやうですね」

「あれは、私の發案でつけた名なんです」

「聴かせる許りでなく、言はせもし、聴いてやりもするのですね」

「さうそ。その通り。しかも、その言はせかたが中々むづがしいのです。聴いてやることこそ、尙更むづがしいのです」

子どもと同じ心持になつてね」

「先生がそれをして下さるのでね。私もでは面倒くさくて、つい、うるさくなつて」

「それでもないでせう。可愛い、お子さんのなさるお話ですもの、お母さまこそ、にこ／＼して聴いてお上げになれるのでせう」

「それは、まあ、そうですねえ」

「それを、大勢のお子さんにして上げるのが、幼稚園なんです。一つに集めて、こつちの言ふ話ばかり聴かせてゐるのでありますね」

「有り難いことですね」

「なあに、だから、私達も楽しいのです」

お話のたね本

お話はしてやりたし、知つてるお話は少ない。これがお母さま方の頭痛のたねです。幸この頃は、その材料を集めたたい本が澤山出てゐますが、多くは小學校以上の子どもへの爲のもので、幼児向きのものは、別にさがさなければなりません。次の二つは、本會の編纂で、少々自家廣告のやうですが、専ら幼稚園の幼児のために適當なお話ばかり集めてあるところに、安心してお使ひになれる便利があります。

○幼児に聴かせるお話

定価金貳圓八拾錢。郵税拾四錢

○幼児の樂しむお話

定価金貳圓八拾錢。郵税拾四錢

兩方とも、日本幼稚園協會編で、東京日本橋區大傳馬町内田老鶴園發行です。